

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

三春わが街

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

■コミュニティだより

VOL. 103 (年4回発行)

■発行日 令和4年3月31日
■発行 三春まちづくり協会
■編集 三春まちづくり協会広報部会
三春町大字貝山字泉沢100-1(旧若駒寮)
TEL/FAX (62) 3988

出前懇談会が開催される

令和3年10月13日、新型コロナウイルス感染症対策が実施される中、出前懇談会が開催されました。三春町歴史民俗資料館の藤井典子さんに「福島県の医療の歴史と三春町の医学者について」をテーマにお話いただきました。

※藤井典子さんが要旨をまとめた資料により一部を掲載いたします。

福島県の医療の歴史と三春出身の医学者について

三春町歴史民俗資料館 藤井 典子

【福島県における近代医学教育一五〇年(県立医科大学)について】



講演される藤井典子さん

本年二〇二二(令和四)年は、一八七一(明治四)年、白河仮病院に医師の養成を目的とした白河医術講義所が開設されたから一五〇年となる。白河医術講義所→須賀川医学校(明治一三年に福島へ移転、一四年に福島医学校となる。明治二〇年廃止。現在

の県立医大の直接の前身は、昭和一九年に設立認可となった福島県立女子医学専門学校↓福島県立医科大学という設立の流れとされているため、本年は本来各種イベントが企画されていた。

しかし、この流れ以外で、幕末から西洋医学を取り入れ、藩校などで医師を養成していた藩も県内にはある。会津藩や二本松藩など設置し、医学教育に乗り出していた。この会津藩に先立って、オランダ医学を取り入れたのは二本松藩で、藩医小此木天然はシーボルトの指導を受け、乳がん手術の成功例を作った。こうした藩以外でも、長崎に医学者を送った藩は相馬中村藩と三春藩ということになる。相馬中村藩では、日本初の子宮外妊娠の診断と手術とに成功しており、福島県は医学的に東北でも先進地であったということが出来る。

【「病院」の言葉を最初に使ったのは】

患者を収容し、治療をする場所のことを「病院」としたのは、戊辰戦争での官軍方とされる。順天堂大学には、そのさいに使われた、「病院」旗が残されている。官軍は上陸した平

潟や、三春にも病院を置いて負傷者の治療にあたった。

三春の場合には一八六八(慶応四年※1)年八月二〇日に荒町龍稔院に病院が設置され、佐倉藩二名、薩摩藩一名の医師は荒町の商家に寄宿した※2。看護には町内から若い女性二〇人ぐらいがあつたという(看護職はまだできていない。洗濯や食事の世話などをしてたと思われる)。官軍は同年十月二十六日以降、病院を引き払っている。亡くなった方は紫雲寺と龍稔院に葬られ、その後一部を除いて近親者などに引き取られて行った。

この時、佐倉から来ていたのが佐藤進(日清・日露戦争時には陸軍軍医総監)で、公式の旅券を使つての海外留学生としては最初の人であり、医学博士号を東洋人として初めて得た人である。

※1 慶応の明治への改元は九月八日

※2 奥羽出張病院頭取の関寛斎は平潟から平に移る。撤収は三春とほぼ同時期

【三春藩の医学関係者について】

福島県内で、オランダ医学を学ぶため、長崎に医師を送ったとし

て三春藩は名前を並べているが、その経緯についてはよくわかっていない。藩校の儒学者としても知られる熊田淑軒(嘉膳)が、長崎まで行っているときれており、それ以上は資料が残っていないためである。

今回の県立医大のイベントのために調べなおしたところ、三春藩からは、熊田以外にも西洋医学を学びに出ている医師がいる。これは、国立歴史民俗博物館(佐倉市)の『地域蘭学者門人帳データベース』を利用して検索した結果で、今後こうした門人帳などを当たれば、さらに増えると思われる。結果は以下のとおり。

熊田淑軒(又沢坪井信道)
(日習堂・安堂) 赤沼立(玄) 睦林洞海
(幕府奥医師佐倉順天堂) 三輪玄誰
(華岡青洲(香林軒)) 天保五年九月二日入門(赤沼・三輪両氏ともに三春藩医)

うち、熊田淑軒については、前述のとおり。熊田は三春出身の医学者・三浦守治博士と義父・三浦義純との養子縁組を取りもっており、この三浦義純は常業出身で、江戸に出て開業したことがわかっている。三浦義純の場合は、どのような経緯をた

三春町の医療の歴史に見える医学者の名前

熊田嘉善(膳)
文化14年生、明治20年没
伴野貞順(本道)
天保3年生
三浦守治
安政4年生、大正5年没

三浦義純
生没年不詳
村田謙太郎
文久2年生、明治25年没
市川栄枝
生没年不詳



どったのか。データベースでは彼の条件と一致するものがなく、門人帳での検索はできなかった。

一方、田村会雑誌での記事をもとに考えれば、三浦義純は、医学者を志して二本松で十年学んだのち、人を頼って江戸に出て坪井信道らに師事し、現在の東京大学附属病院副院長(第二病院)となる。その後熊田末広町に「三春堂」の看板を掲げ、七十を過ぎるまで一般の人々の診療にあたっていたということになる(三春堂を裏付ける本がある)。

(裏面へつづく)

熊田淑軒も江戸に出る前に二本松の小此木玄智（天然）に師事している。三春から医師を目指す人は、先に二本松の小此木家に学び、その後江戸に出て他の医師に師事するのが一般的だったのかもしれない。

【熊田淑軒は

医学に携わったのか】

長崎まで行って西洋医学を学んだ、三春唯一の人と言える熊田淑軒は、三春町内に様々なエピソードを残している。今回、三春小学校に提出した熊田の履歴を発見したので、下にその部分を掲げる。

「熊田嘉善当六月五十六歳六月師範学校卒業免状無く旧二本松藩鈴木敬蔵へ天保三年五月ヨリ同暦五年正月マテ都合三ヶ年支那学修行東京坪井信道へ天保七年八月ヨリ同暦九年五月マテ都合三ヶ年和蘭医書修行旧三春藩二於テ明治二年十一月ヨリ同暦三年七月マテ権の参事勤務同年七月ヨリ九月マテ文学教授勤務同年十一月ヨリ同暦四年正月マテ医学勤務同年正月ヨリ同五年三月閉校被仰出候マテ文学教授勤務」

（明治六年小学校設置當時之文書）
また、熊田の教え子である野口勝一は、茨城日日新聞で、熊田は長州まで出向いて坪井

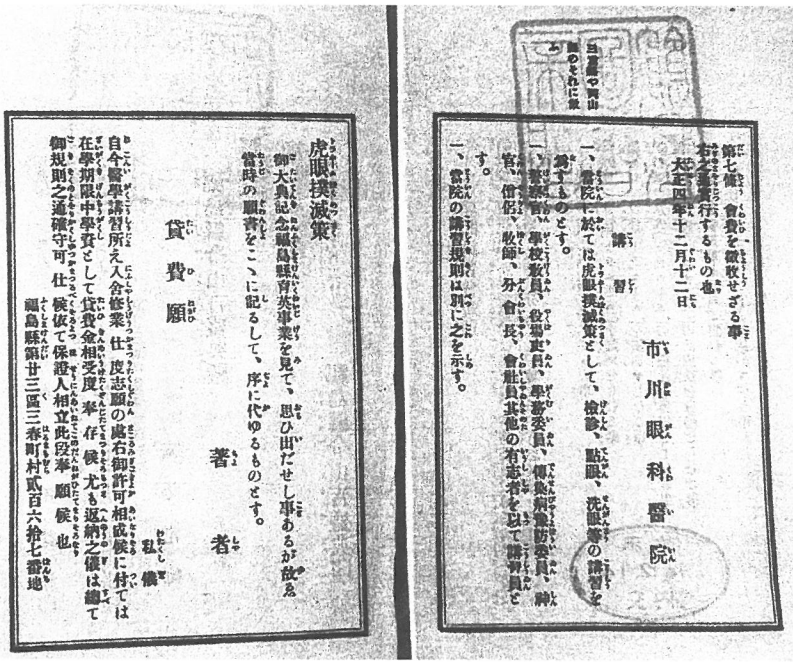
信道の門に入り、西洋医学を修めたとしている。これらの資料だけでは、長崎まで至っているのか、行ったとしてどこで学んだのかまで知ることはできない。いずれにせよ、種痘などについて研究していた坪井信道の門をくぐりながら、熊田は三春に戻ってから医師として活躍することはなかった。その理由は、西洋医学を学んだ熊田に、三春藩は黒船来航以後の視察と情報収集を任せることになったこと、反射炉の造作について、おそらくヨーロッパからの書籍で学んでいた（熊田はオランダ語を読んでいる）ことから、水戸藩に招聘されて反射炉づくりに携わったこと、その後各藩に招かれ、銃器製造についてのアドバイザーを頼まれたことなどが理由と思われる。野口の回顧談では、常に兵書の講読を請う者門に満つという状態であった。

【三春町の医療状況】

江戸時代に種痘を行ったという記録はないが、明治四年になって三春藩は種痘を紫雲寺で行っている。これは明治三年、太政官布告により種痘の普及が指示されたことによる。三春で指導にあたったのは、明治二年に種痘術免許を種痘館（大学東校）で受けた、伴野貞順と思われる。種痘が制度化されたのは明治九年からで、出生届を提出する際に、いつから種痘が可能になるかを記した用紙が配られ、接種すれば、接種済み証明書を役所に提出することになっていた。

明治二十年～三十年代は天然痘だけではなく、コレラなどのまん延もあり、明治二十九年には「三春町衛生組合」が発足、伝染病対策が行われるようになる。患者の発生とともにその自宅を徹底的に消毒し、窓や出入口などを封鎖してしまう方策がとられる一方、河川などの清掃やごみ処理にも目が向けられるようになってきた。

昭和二年からの三春小学校の看護日誌を見ると、学校で特記している児童の病気は、腸チフスとトラコーマ（トラホーム）である。歯の治療のための設備を導入した、という記述もあり、歯科・眼科ともに問題が多かったことがうかがえる。また、三春小学校では家で食事ができない児童のため、ある程度の給食を出す制度があった様子が見える。虚弱児の診察といった記事も見られ、児童の健康状態を観察する、健康診断のような制度ができてきた。



当時の資料の一部ページ（写し）

「三春大好き」

深谷 陽子

歴民友の会活動に「紙芝居を作って知ろう三春の歴史」のサークルができたので入りました。手始めに三春といえば「愛姫」が話の種と決まり「田村氏盛衰記」を作り、続いて愛姫が伊達政宗に十一歳で嫁いってから後のことも好奇心をもって調べ愛姫特集を作りました。

今作っているのは「三春の寺」で十の寺院に、各お寺の歴史やエピソード、思いを取材させてもらいました。ど

のご住職も親切にお話ししてくださいました。その中身がうまく描けず奮闘しています。できた紙芝居は歴史資料館の受付で貸し出ししていますので、集会の勉強会や余興にご利用くださいばうれしいです。

三春の歴史を学ぶといえ、江戸時代、三春藩が郡山の阿武隈川東一帯からおおよそ旧田村郡を領地として、二百年以上三春に城を置く藩主が治めました。領内各地から城下町三春への街道が通じていて城下の出入り口は八幡町、新町、清水、荒町、北町、みな門番がいました。領地の五郷には経済を行う代官や庄屋が居

て、年貢を産物で納める場合は藩内の生活用品に資する原料にも使われ、町の商工業が成り立ちました。

桶屋、繭屋、織元、染め屋呉服店、蔵屋宮大工、家具大工、鍛冶屋、味噌醤油に酒の醸造元、下駄屋、ちようちん屋、竹籠屋、更に多種多様な食品や生活必需の職業があり、三春はそれらの町人と藩士役人と寺社も隆盛な城下町でした。

藩の時代は過去となり、世界はAI、宇宙情報通信時代、大資本会社の時代になり日本中同じような街並みが造成されています。

今の世の中で小さな城下町三春は、昔とは当然変わりましたが、先人の英知のおかげで、開発の名目での自然破壊をせずに景観保護の町づくりに気を配り、お城山を中心に散策路に意外性を含む山の尾根や、春の桜錦を誇る貴重な自然遺産を保持しています。それに気づいてこの先役場と共に町民みんなで三春の長所を生かした町づくりに励みたいものです。



編集後記

▼新型コロナの影響で今年度も地域のイベントの多くが中止になりました。個人的にはコロナ禍以降、散歩ならぬ山歩（さんぽ）することが多くなりました。山歩の楽しみは、自然の中では余計なことを考えないため、日頃のストレスが消えて行くことでしょうか。▼三春町には登山の対象の山は残念ながらありませんが、町内の尾根伝いに散策路が山歩に丁度良い。月に何度か龍穩・愛宕散策路・不動山散策路・桜谷散策路・田村大元神社から東館散策路・お城山・光岩寺から月斎館散策路・龍穩院から戻るとゆくり歩いて2時間の予定です。▼もう一つの楽しみは三角点を見つけてること。三角点は測量の基準点ですが新田次郎の「剣岳点の記」を読んだから興味を持ちました。三角点には一等から四等まであり貝山の白山比咩神社裏に二等三角点があります。散策路上のお城山にも三角点がありますので山歩を楽しみながら探してみたいかがでしょうか。今年こそコロナ終息を願います。

（吉田寿雄）

コミュニティだより
「三春わが街」第一〇三号
発行日 令和四年三月三十一日
発行 三春まちづくり協会
編集 三春まちづくり協会
広報 部 会
三春町大字貝字泉沢一〇一
(六二) 三九八八